めぐるりアート静岡

記憶をめぐる　記憶をつくる

2016/10/25 TUE → 11/20 SUN

静岡大学

静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art
30th ANNIVERSARY

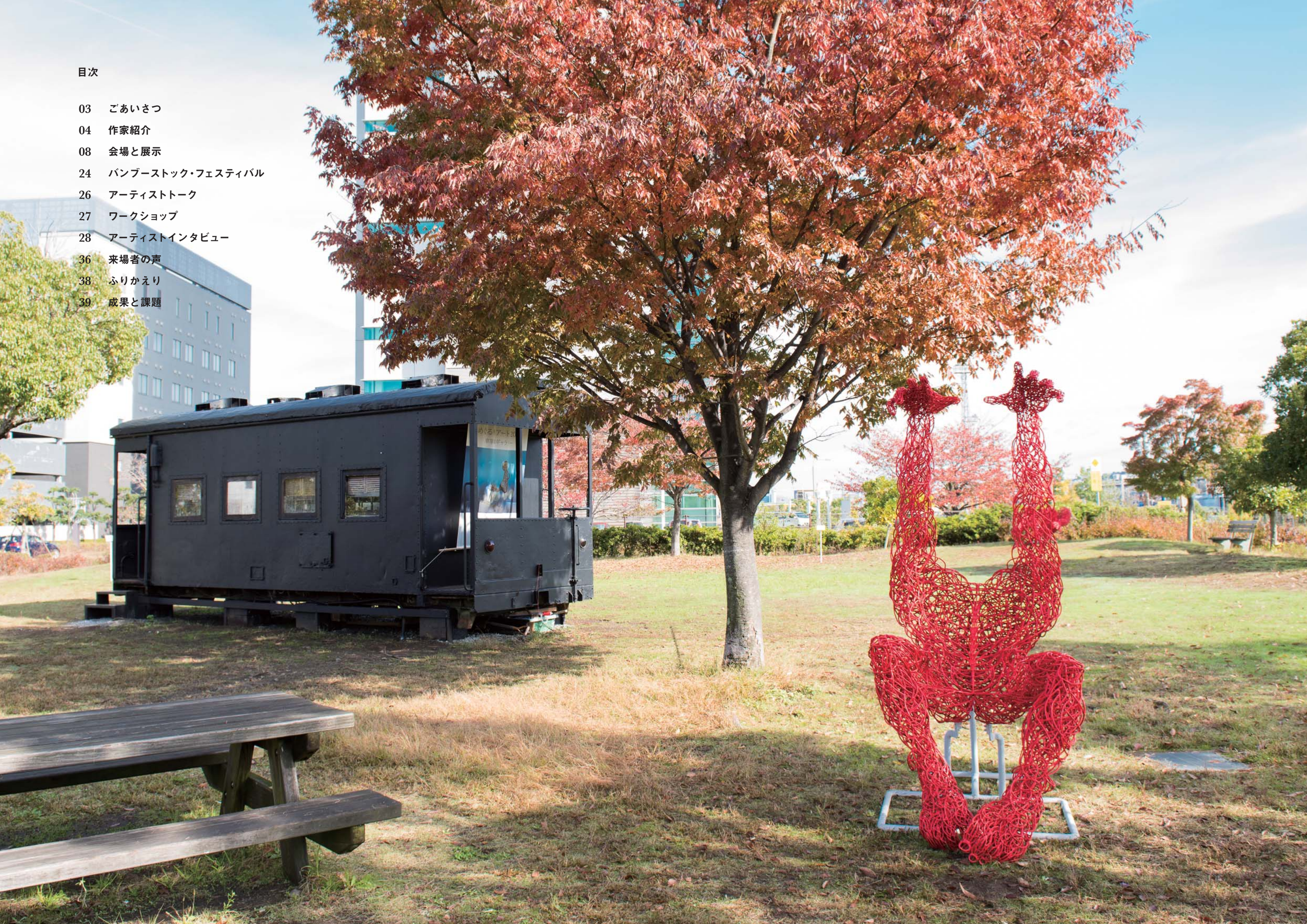
静岡市美術館
SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART

静岡市

キミナル スキミナル プロジェクト
静岡市文化振興財団

目次

03　ごあいさつ
04　作家紹介
08　会場と展示
24　バンブーストック・フェスティバル
26　アーティストトーク
27　ワークショップ
28　アーティストインタビュー
36　来場者の声
38　ふりかえり
39　成果と課題



ごあいさつ

「めぐるりアート静岡」は、作家、美術館、街や場が秘める力の結び目です。文化庁助成による静岡大学アートマネジメント力育成事業の一環として４年前に始まりました（助成期間：平成25年度〜27年度）。その助成期間が終了した今年度は人材育成機能を保つ美術展として、静岡市、静岡市文化振興財団、静岡市美術館、静岡県立美術館と静岡大学との連携により継続することができました。

展覧会の目的は、「静岡から芸術を発信する場の創出」です。

第４回目となる今年度は、会期を２月から11月に変更するとともに、会場の入れかえも行いました。テーマは「記憶をめぐる　記憶をつくる」です。新たな会場である、ＪＲ東静岡駅北口の広大な市有地「アート＆スポーツ／ヒロバ」、そして旧マッケンジー住宅および中勘助文学記念館・杓子庵に深く関わる命名です。それらは静岡の産業や文化、また福祉を振りかえるときに、欠かすことの出来ない場といえましょう。そしてその記憶を単に過去のものとするのではなく、今を生きるアートと響き合うことで新たな記憶が生まれることを期待しています。静岡県立美術館と静岡市美術館は「めぐるりアート静岡」の当初からの共同主催者です。これまで静岡県立美術館会場の作家として選抜された８名のうち６名は静岡県の出身でした。子どもの頃から何度も訪れた美術館のエントランスホールやロダン館などでの自作展示には、記憶がよみがえるような瞬間があったのではないでしょうか。静岡市美術館では、今まさにそこを訪れる人びとの心のなかに新たな記憶が刻まれることでしょう。

今回参加した６名と１組の作家は、それぞれのやり方で場の力を引き出しました。静岡市美術館エントランスホールを大胆に使いこなしたNerhol。静岡県立美術館では鈴木基真が風景彫刻によってロダンに対峙し、福井利佐は来場者を館外から館内さらに大階段の上に誘うよう作品を配しました。自然の中に佇む中勘助文学記念館・杓子庵を会場に選び、勘助の心に寄り添ったのは木下琢朗です。旧マッケンジー住宅の千葉広一は、亡きマッケンジー夫妻の息づかいや建築家ヴォーリズの気配に自らの記憶を重ねました。「ヒロバ」の殺風景な広がりは日詰明男の「黄金比の実験都市」プロジェクトに委ねられ、その奥の緑地では千葉広一の真っ黒な車掌車ギャラリーと岩野勝人の真っ赤な椅子（彫刻）が奇妙な、しかし鮮やかなコントラストをかもし出しました。

会期末、晴天に恵まれた最終日のバンブーストック・フェスティバル＆マルシェ。「竹の実験都市」は地場の産品を扱う“市”となり、またクリエイティブな飲食ブースの出店などで大盛況。日暮れには、黄金比の音楽「たたけたけ」の演奏が始まり、竹の星籠に火が入りました。竹の爆ぜる音が鳴り響くなか、今回の「めぐるりアート静岡」はフィナーレを迎えました。

最後になりましたが、本企画への参加を快諾し、最大限の力を発揮してくださいました作家の皆さま、ご協力いただいた各会場の関係各位、また「ヒロバ」のフィナーレに際し竹の星籠への点火・炎上・鎮火を見守ってくださいました静岡市消防局千代田消防署ならびに静岡市消防団第15分団の皆さまに、この場をかりて篤く御礼を申し上げます。また本展の企画および準備全般にわたって、専門的な知見を惜しみなくご提供くださいましたキュレーションチームの皆さま、そしてこの新たな枠組みでのプロジェクト実現に向けてご支援下さいました静岡市および静岡市文化振興財団の関係各位に深く感謝の意を表します。「めぐるりアート静岡」が、若い作家に勇気を与えるとともに、私たちに新たな出会いをもたらし、地域の活力を高め、また心豊かな社会の実現に資することができれば幸いです。

2017年3月

白井嘉尚

作家紹介

日詰明男

「月暦七夕 青部 バンブーストック」川根本町青部 2016　撮影：永井萌美

黄金比と竹の実験都市

日詰明男さんは、1960年生まれで大学で建築を学んだ。幾何学、特に“黄金比が生み出す厳密な造形”の研究をつづける異色の研究者、造形作家である。9年前から川根本町に暮らしている。世界の学会に出かけ、毎年「バンブーストック・フェスティバル」を彼の地で開くなど、さまざまな活動をしている。

黄金比とは、1.618033989…と無限に続く無理数で、X＝1＋1／Xという2次方程式の解である。この不思議な比率が、生命や自然の造形のなかにさまざまなカタチであらわれる。例えば、多くの植物の葉のつき方は黄金比に近似するという。それはそのカタチが、太陽の光を最も効率よく受け、荷重を最もバランスよく分散させるからだという。黄金比は自然界のさまざまな美しいカタチにあらわれる。

「黄金比は、工学的に見ると最もシンプルなフラクタル構造であり、最高の攪拌効率を有する」— 個別具体のカタチの研究を通じてこう確信するに至った日詰さんは、そこに数理工学的な意味にとどまらず「来るべき論理形式の宝庫」を見る。それはリゾームやフラクタルという概念を包摂し、そこには「今後数千年にわたって人類が取り組むべき課題の殆どが潜んでいる」という。（『音楽の建築　日詰明男論文集1990-2005』Star Cage、2006年）

五角形は黄金比の基本的なカタチである。五角形を基本とした建築と街区による街は、四角いビルと直行する道路で出来た近代都市に代わるべき、来るべき“未来の都市”である。それは直行する四角四面な街と違って、常に複数のルートが確保され、表裏なくスラム化しにくい街だという。そんな黄金比で出来た街に住む未来の社会はきっと、速さを競う強欲資本主義を捨てて、共生という持続的な効率性を手にしていることだろう。速さは瞬間的な効率だが、生命は持続する時間、有機的な全体の中で最大の効率を追求する原理である。黄金比はその優れた解だろう。

竹もまたサステナブル（持続的）な素材である。地下茎（リゾーム）で逞しく増え、中空の真っ直ぐな茎は、軽くしなやかで、柱にも、食器にも、編めば籠にもなる。今回は、静岡で竹林の利用促進に取り組む「Groomしずおか」の皆さんにお願いして、市内近隣の中山間地の竹を切り出して頂いた。

その竹を素材に、会期中、多くの市民の皆さんと共同でどんな街が出来上がるか、楽しみである。参加は自由、誰もが好きなときに参加して創意工夫を発揮する、これもまた未来の共生の街にふさわしい。夕方には、竹を叩いて黄金比のリズムを刻む「たたけたけ」を練習し、会期末の「バンブーストック・フェスティバル」（11/19、20）で盛大に合奏される筈である。フェスティバルには、“黄金比のまち”を舞台にオルタナティブスペース・スノドカフェがプロデュースする地産地消のマルシェ（屋台）が登場、是非、皆さん、ご参加を！

以倉新（静岡市美術館学芸課長）

千葉広一

《何処へ》2016

瑞々しい感傷

千葉広一の作品は優しく親しみやすい。私たちのさりげない心の動きが、控えめに、しかし鮮やかに提示されている。もう一つの特徴は、技巧的な見え方を限りなく削ぎ落としていることだろう。小さな素描をノートから切り抜き、日常にからませ、カメラで写し言葉を重ねる。光、季節、花・・・友、母と子、家・・・思春期、眠り、別れ・・・すべてリアルで、いとおしい。千葉は、過ぎゆく時の中から、瑞々しい感傷をすくいとる。

意外にも千葉にとって表現の原点は、生きづらさであったという。10代の終わりころ、油絵を描きながら常に、画面を黒く塗りつぶす衝動につきまとわれていたそうだ。藝大入学後、気持ちは絵から離れ山に向かう。嶮しく美しく崇高で、生と死が境を接する非日常に身をおいた。その後、美術教員として静岡に転居し創作活動からさらに遠ざかる。一方で建物への興味が芽生え、戦前期の屋敷に仮寓した後、古い車掌車を入手。水見色の林間に設置して7年ものあいだ住まいにしたという。

20代から30代にかけて息をひそめていた「絵を描きたい」という内なる声が、固有の記憶をまとう家や車掌車での暮らし、そして身近な自然の豊かさや生徒との交流を通し、しだいに確かなものになっていった。千葉が、「本当に表したかったもの」とは何だろうか。それは誰もが時の流れのなかにあり、日々さまざまな思いをいだき生きているという、平凡な、しかし、かけがえのない生のありようではないだろうか。

白井嘉尚（静岡大学教授）

岩野勝人

《MENTAL CHAIR Ⅵ》1995-2015

「MENTAL CHAIR」、再び！

岩野勝人さんの「MENTAL CHAIR」（メンタル・チェア）は、太さ6mmの鉄筋を20～30cm位に切っておき、無数に曲げて溶接して作られている。一体作るのに一か月半以上かかる力技である。人の形をした椅子として、実際に座ることが出来る。座ってみると、硬い鉄筋でできているのに体にフィットして意外と座り心地がいい。大きな人ならぬ人に包み込まれ、宙に浮くようである。真っ赤な色は、全身に張り巡らされた血管を思わせもするが、溶接時に溶けて輝く鉄の色として、エネルギーに満ちた色として選ばれている。

椅子は、人が座ってこそ椅子である。しかしこの椅子は「彫刻」であり、この「彫刻」は誰かが座って完成する。既に20年以上に渡って、さまざまな場所で展示され多くの人を受け止めてきた。人の形に頭がないが、“椅子に頭があったら、座ったときにいらんこと吹き込まれて休めない、頭は休めて欲しいから・・”という20年前のコメントも、理屈が勝りがちな今の世の中、あながち冗談とも言えず作家らしくて面白い。それは、“もっと社会の中に入って行ける美術があってもいいだろう”という作家の考えを体現した作品なのである。

「MENTAL CHAIR」は、“なにあれ？スゲー、カッコいい！”という子供たちの歓声を受け止め、恐る恐る体を預けた大人たちの心を寛げてきた。“町の小さなパン屋のような作家でありたい”と願った作家は、街の学校や山間の村、小さな島々に出かけてワークショップを行い、多くの出会いの場を生み出してきた。大学で教えるようになってから、学生を連れてますますその機会は増えた。

それは、国際展や世界のアートマーケットを賑わすアートとは違った、もう一つのアートの在り方である。アートは、人間の自由な精神を養うことが出来る。そして遠く虚構的な世界で繰り広げられるアートより、地に足の着いた身近な町のパン屋さんのようなアーティストの方が、地域の生活世界をよりよくできる。この20年、岩野さんの活動はそんな希望を感じさせるものだった。

「MENTAL CHAIR」は、昨年度の「めぐるりアート静岡」（静岡市美術館会場／2016.1～2）に続き2度目の登場となる。今年から会場となった野外の「アート＆スポーツ／ヒロバ」の芝地に、是非にとお願いした。前回の「Ⅳ」に加え、新たに両腕を高く掲げた「Ⅲ」が登場する。何度も塗り直され、各地を転戦してきた歴戦の勇士に、是非、座って頂きたい。

以倉新（静岡市美術館学芸課長）

鈴木基真

撮影：Ken Kato

実在感のない風景

青々と茂った樹木、西洋風の住宅、ガソリンスタンド。見たことがありそうで、なさそうな風景が、展示台の上に、整然と並んでいる。一見、模型のようにも見えるが、良く見ると、風景を構成するひとつひとつの造形物の表面は、ノミの跡に覆われ、細やかに着彩されており、作者の手仕事の痕跡を感じさせる。鑑賞者は、そこまで確認して、ようやく目の前の造形物が、土台ごと一本の木から彫り出され、造作された木の彫刻作品であることに気が付く。ミニチュアの風景を造作するという行為は、プラモデルや、情景模型の世界では、一般的に行われており、鑑賞者の中には、鈴木の風景を模った造形物を、彫刻としてではなく、経験的に、プラモデルや模型に、重ねあわせて見る人もいるだろう。このことは、彫刻というメディアが、人体像を中心に発展してきた歴史であったことを、逆説的に、われわれに思い出させてくれる。

とりわけ第二次世界大戦以降に展開した、さまざまな美術の潮流は、彫刻≒人体像という図式を、とうに無効にしてしまった。近年は、行為や、非物質的なメディアまでもが取り込まれ、大原則と考えられていた、物体による形態表現としての彫刻の概念すら、変更を余儀なくされてきている。そのような状況の中で、鈴木は、人物をモチーフとしないまでも、木を彫り、粘土をこねて造作するという古典的な彫刻の手法を選択しつつ、現代人にとっての、彫刻の在り方を模索し、彫刻の歴史に挑んでいる。

鈴木の彫刻は、物体として目の前に在っても、なぜかしら実在感を感じさせない。これは、モチーフの源泉が、外国映画やゲームなどから引用されたものであること、彩色された色が、現実の色をそのまま再現しようとするのではなく、変更を加えた、いわば映像的ともいえる淡い色彩であるということ、人の目線の高さに台座を上げ、視覚的に見せていることなど、いくつかの制作上の仕掛けによる効果であると思われる。

鈴木が現代の感性で造りだした彫刻を、今回は、徹底した写実で生命を表現することに挑み、近代彫刻の祖と仰がれてきたロダンの彫刻と同じ空間に展示する。この試みは、両者間に、いかなる摩擦や対立を生み出すのであろうか。それとも、1世紀以上離れてもなお、彫刻家にとっての課題が、普遍的であることをわれわれに気づかせてくれるのだろうか。

川谷承子（静岡県立美術館上席学芸員）

福井利佐

《LIFE-SIZED（an old man）》2013

切り絵を拡張した現代の切り絵

福井利佐は、紙にペンで描いた線を、カッターで切り出すという手法で、陰影に富んだ独自の世界を表現する。福井が用いる技法は、一般的に「切り絵」と呼ばれている。福井の創造する作品の世界が、明るく健康的というよりも、どことなく影や深みを感じさせるのは、線と余白の陰影が生きる、切り絵という技法のもつ表現力に依る部分もあるだろう。

しかし、一概に切り絵といっても、福井が作り出すイメージは、われわれが幼い頃、絵本「もちもちの木」などで親しんだ切り絵とは、受ける印象が、大きく異なる。福井の表現が、いわゆる昭和時代の切り絵と違う点は、一つはモチーフの選択によるもので、民話の登場人物などではなく、身近な人物や生き物などが、描かれているという点が挙げられよう。目の前の実在する人物の表情や、顔の造作を、丹念に観察して、その個体ごとの特徴を、写実的に描写している。人物の内面性にまで踏み込んでいるかのようだ。

もう一つ、福井の切り絵を特徴付けているのが、緻密で流れるような曲線である。輪郭線を強調するのではなく、人間や生き物の表皮や毛の部分を、細かい線の集積で表している。曲線は、途切れる事無く、流れる様につながり、交錯しあいながら、表情豊かなイメージを作り上げている。曲線の方向や、線の間隔の粗密の変化によって、違いが生まれている。

今回展示を行う、「LIFE-SIZED」シリーズ（2013年）は、老若男女の人や動物の顔が、等身大をはるかに超える大きさで表されている。顔の造作の特徴や表情、性別や年齢によって異なる、肌の質感やしわを描き分ける事に、作家の、関心が注がれているように見える。画面が大きい事により、手元で手繰る本のサイズで見る作品の印象とは異なり、線の躍動感が、より生き生きと目に飛び込んでくる。このシリーズでは、線の色に、従来の黒ではなく、表面に白を、また裏面には、赤や緑などの鮮やかな色を使用している。陰影が強調される黒から、白の柔らかさを取り入れ、画面は明るく、ニュートラルな表情を生み出している。

川谷承子（静岡県立美術館上席学芸員）

Nerhol（田中義久・飯田竜太）

《multiple-roadside tree #3》2016
©Nerhol　Courtesy of YKG / Yutaka Kikutake Gallery

抵抗の身振り

《multiple - road side tree》（2016年）は、伐採された街路樹を5ミリ単位で輪切りにし、撮影した断面の写真を何十枚も束ね、カッターで1枚ずつ“彫り出した”ものである。

1本の街路樹は輪切りにされて、写真というイマージュ（像）に変換されてのち積層される。しかし、一度、イマージュの薄膜の世界を通り抜けた木は、その厚みを失っている。束として重ねられた写真（紙＝木）もそのままでは1枚の写真（像）に過ぎない。重ねられた写真が、甘皮を剥ぐように、作家の手により年輪に沿ってカッターで1枚ずつ切り出され、木は薄い厚みを回復する。その減じられた厚みに木の生きた長い時間が想起される。

「Misunderstanding Focus」は、静止したモデルの顔を正面から3分間、約200カットに渡って連続撮影し、その写真を束ねて“彫り出した”ポートレートのシリーズである。2012年以来、さまざまな形で発表されてきた。《Atlas》（2014年）は、それを本の形にまとめたものである。

生きている人間は常に動いている。約200枚の連続写真は、体や表情の僅かな動きを孕んで微妙にずれていく。その「動き」を1枚ずつカッターで“彫り出した”写真は、ポートレート（肖像）とは何かという問題を孕んで広く注目された。表情は常に変化しているが、ポートレートはそれを1枚の静止画として定着する。そこには、「顔のどの水準に焦点（Focus）を当てるべきか、・・・認識上の誤解（Misunderstanding）がある」[1]のである。時間をまとった「肖像」には、「1枚の写真では抜け落ちてしまうその人固有の何か」[2]が顕れる。

どちらのシリーズも、彫り込まれ時間を内包した彫刻としての写真が再度撮影され、1枚の写真としても作品化される。作品は2次元と3次元、唯一性と複製性（マルティプル）の間を複雑に往還し、メディアを越境し形を変えながら軽やかに流れていく。

Nerholは、飯田竜太と田中義久の二人による。ともに静岡県出身だが彫刻家とグラフィックデザイナーとして東京で出会っている。田中は多くの写真集やアートブックの装幀を手掛け、「視覚情報を・・どう物質化させるか」[3]に拘ったデザインは、すっきりとして評価が高い。飯田は彫刻家ながら、文字通り「本」や「文字」を素材にした「彫刻」を発表してきた。かつて一冊の本の単語を一語ずつ全て繰り抜くような作品[4]を制作している。二人とも紙や「複製」としての「印刷物」に深く関心を持つ点で共通する。

Nerholの作品が興味深いのは、二人がデザインと美術という重なりつつも異なるフィールドに意識的だからだろう。デザインは有用性をもとにものごとに「構造」を与える。宿命的に「複製」され、「商品」として「流通」し「消費」される。多くの「要求」に晒されるが「必要」の中で洗練される。美術は、特に現代の美術は何ものにも代えがたい「自由」を手にするが、寄る辺なくときに果てのない自己への問いに悩まされる。

二人の作品のスタイリッシュに過ぎる見かけの下には、膨大な手業が潜んでいてアウラの淡い光に包まれたかと思えば、隣には複製され厚みを減じた作品が同列に並ぶ。作品の軽やかな越境と往還の身振り、その速度自体が、加速する資本主義社会の「消費と生成、忘却という巨大なサイクル」[5]への、そのなかをしたたかに生き抜く二人の抵抗の身振りとなっている。

（1）星野太「時の彫刻」「Promenade - roadside tree」マイブックサービス、2016年　（2）ネルホルインタビュー『めぐるりアート静岡News』第2号、静岡大学、2016年9月　（3）山峰潤也「multiple - roadside tree / その存在それ自体について」i 前掲書　（4）飯田竜太（ornament of book 1）2006年　（5）Nerholステートメントより

以倉新（静岡市美術館学芸課長）

木下琢朗

《山から海へ》2015

記憶を繋ぐ

山に分け入る、川を往く。森を経巡る。木下は山川草木に聞き耳を立て、対話し、声なき声にカタチを与えていく。天と地、上と下、彼岸と此岸を繋いでいく。わたしたちは、木下の創り出した物語という木舟に乗り込み、時には魚となって、あるときには鳥となって、その土地の記憶を頼りに両界を往還する。

そもそも記憶というものは、個人に所属するものと、自分の外側、すなわち世界に所属するものとがある。もちろん両者はきっちりと切り分けられるものではなく、コインの表裏のように分かちがたく結びついているものである。

ところで、土地には、わたしが「知っている記憶」とまだ「知らない記憶」とがある。自分の生まれ育った土地のことを思い浮かべてみれば想像が付くだろう。木下の作品は、「知っている記憶」と「知らない記憶」を橋渡しし、まるで元々「すべてが繋がっていた記憶」のような物語を創り出す。言い換えると、わたしの記憶と世界の記憶との境界線が曖昧になる。そうして、その土地に重層的に堆積される記憶と深く結びついていく。

木下の作品と対峙しながら、木下の行為を時間軸に沿って追体験してみることで、記憶と時間の問題について、いつもよりゆっくりと考えてみるのはどうだろう。

平野雅彦（静岡大学特任教授）

ニューロ・アーキテクチャー「黄金比の実験都市in東静岡」2016

実験都市の建設

実施日：10/29（土）、30（日）、11/3（木 祝）～6（日）ほか随時
会期中、日詰明男＆竹祭artist集団BAMBOOSTOCKと市民参加者により、“竹の実験都市”が建設されました。黄金比の結晶「ペンローズ・タイル」に則り五角形の区画を描き、市内近郊から切り出した竹で40基のティピを建築、うち24基にシートを裁断してテントが張られました。合間に、会期末のフェスティバルに向けて、竹の楽器作りや黄金比の音楽「たたけたけ」の練習も行われました。

2016/10/30(日)→11/20(日)

アート＆スポーツ／ヒロバ

Art & Sports / Hiroba

黄金比を使った竹の実験都市

私たちの記憶はどのように構成され、
どのように呼び出されるのでしょうか。
それはコンピューターのそれとは全く異なる形式でしょう。
私たちは記憶に座標（アドレス）を用いません。
私たちの記憶は、ニューロンネットワーク上に、分かちがたく、
ホログラフィックに、偏在しています。

同様に、この実験都市で番地（アドレス）を付けることは
あまり意味がありません。
私たちはイメージの連鎖を手繰ってすみやかに
目的地へ達します。
ここでの人々の動線は、私たちが脳内で記憶を呼び出す仕方に
似通っていることでしょう。
それは竹の地下茎（リゾーム）の
ネットワークとも通底しています。
中心はどこにもない、あるいは至る所が中心である。

この実験都市で生活を続ければ、記憶だけでなく、
やがて新しい「思考の鋳型」ともなるでしょう。
それが「ニューロ・アーキテクチャー」と命名した所以です。

日詰明男
Akio Hizume

大学で建築を学んだ後、25年来、自然界の様々な形の中にあらわれる不思議な比率、黄金比に基づくフラクタル構造を、造形や音楽で表現する仕事を続けている。主な作品に、《民主主義的階段》（U.S.A／NZ）、《黄金比の茶室》（コスタリカ／U.S.A.／静岡）、《フィボナッチ・ケチャック（たたけたけ）》など。著書に『生命と建築』（1990）、『音楽の建築』（2006）がある。

1960年　長野県長野市生まれ
1987年　京都工芸繊維大学建築学科卒業
武蔵野美術大学特別講師（2008ー）、
龍谷大学理工学部客員教授（2009ー）／静岡県榛原郡川根本町在住

1994年　「眼の宇宙ーかたちをめぐる冒険」兵庫県立近代美術館（兵庫）
2006年　「美術館ワンダーランド　夏の思いで　今を生きる」安曇野市豊科近代美術館（長野）
2008年　個展「星ボックリ茶寮」京都芸術センター（京都）
2010年　「黄金比のカタチ」静岡市美術館（静岡）

《何処へ》2012-2016

《国鉄ヨ5000形／車掌車ギャラリー》車体製造1952年

2016/10/30 SUN → 11/20 SUN

アート＆スポーツ／ヒロバ

Art & Sports / Hiroba

千葉広一

Kouichi Chiba

現実と仮想現実との境の消失は、アートだけのことではない。そんな趨勢の彼方に千葉の営みがある。小さな素描をノートから切り抜き、日常にからませ、カメラで写し言葉を重ねる。光、季節、花・・・友、母と子、家・・・思春期、眠り、別れ・・・すべてリアルで、いとおしい。千葉は、過ぎゆく時のなかから、瑞々しい感傷をすくいとる。

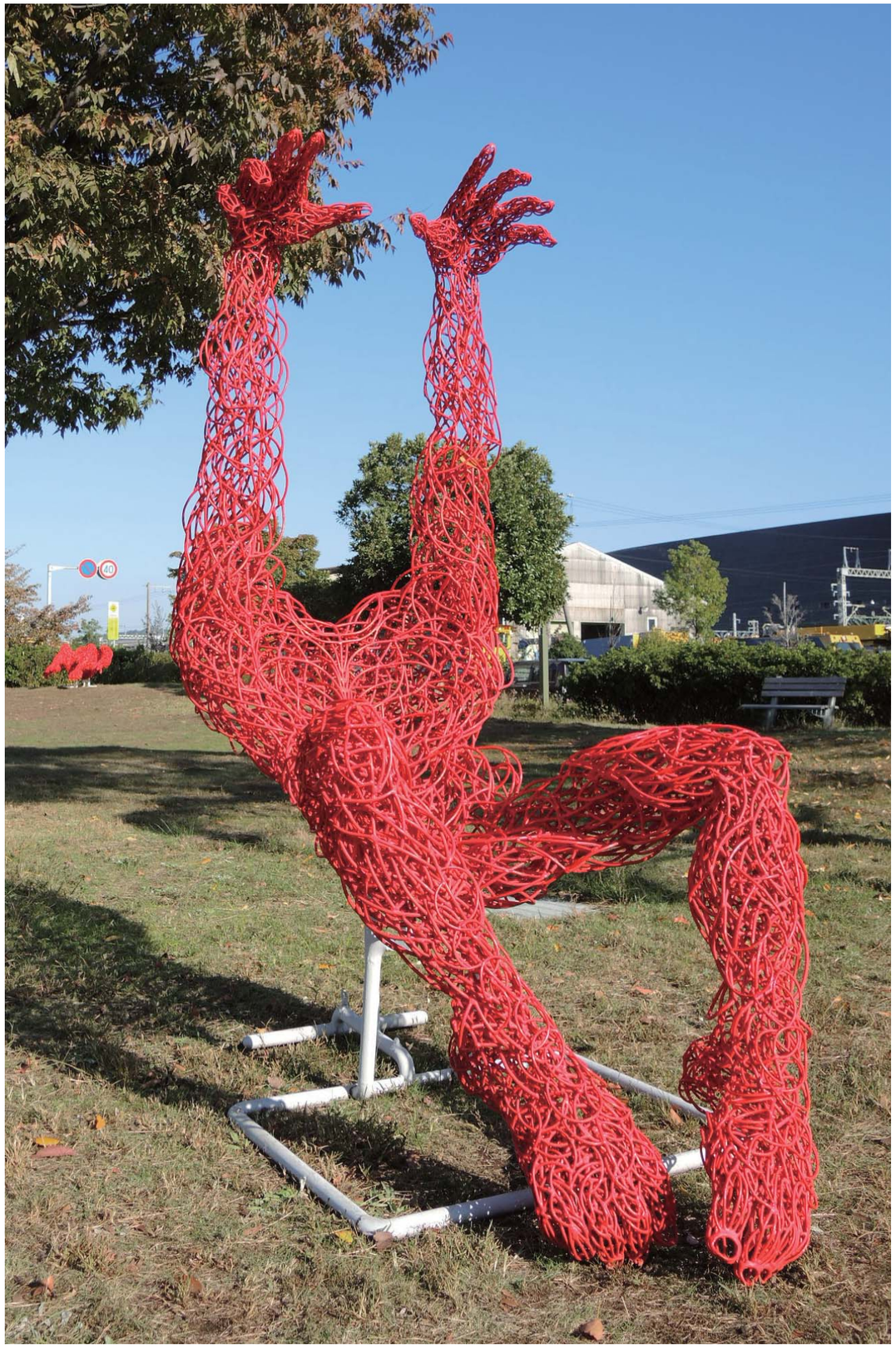
1967年 埼玉県浦和市（現 さいたま市）生まれ
1992年 東京藝術大学絵画科油画専攻卒業
美術家／静岡市在住

2012年　個展「いつか・どこか・きっと」ギャラリーsensenci（静岡）
2012年　「MAX A5 2012」KONTORS Galleri（デンマーク）
2013年　「写真新世紀 2013」佳作／東京都写真美術館（東京）
2014年－2015年　静岡新聞日曜版に詩人平田俊子のエッセイ挿画として作品連載（全88回）

何処へ

ここではない何処かへの衝動をいつも抱えていた。年月を重ね、たくさんの出会いと別れを経験し、ここではない何処かの、その在り処が漸く見えて来た気もしている。
海沿いの古い洋館の主は、茫洋とした海原の向こうに、展望室から見上げる星空に、何を見ていたのだろう。黒光りのする鈍重な貨車は、自ら動く事もできず、それなのにここまで来てしまった。彼はかつて、たくさんの希望と僅かな諦めを積んで、僕の知らない街を走っていた。車輪を奪われた彼に、主を失った洋館に、僕は静岡の緩い秋風の中で3週間の記憶を与えようと試みた。

何処へ。立ち止まり、立ち止まり、躓いて、何処へ行くのだろう。
あまりに遅い歩みに、足跡は無数の轍に消える。
この体をめぐるどうしようもない血の記憶が、何処かにあるはずの記憶を求め、それが必ずしも過去のものでは無いことを知る。



〈MENTAL CHAIR Ⅲ〉1995-2016

〈MENTAL CHAIR Ⅳ〉1995-2016

2016/10/30(日)→11/20(日)

アート＆スポーツ／ヒロバ

Art & Sports / Hiroba

〈HUGE FOOT〉2005

作品「MENTAL CHAIR」（メンタル・チェア）

赤い、人型の椅子である。頭はない。人が座ることで完成形となり、頭が一つ現れることになる。座った人の年齢や容姿、その人の雰囲気も取り込んで、その「場」のイメージを変容させる作品である。それは座った「人」を支えるべき支持体であり、鑑賞される「彫刻」としての主体でもある。また、設置される場所や環境との関係においても、大いに変貌する作品である。

今回は東静岡の公園に設置する機会を得た。今年冬に静岡市美術館にて展示、多くの方々に座って頂いたMCⅣと、新たにMCⅢを連れ出すことにした。駅前公園の豊かな緑の中の大きな樹の根元に、腕を大きく伸ばした赤い椅子を設置してみる。

赤い椅子に腰を深く下ろして、ゆっくりと、その腕の伸び行く先に視線を移してみる。

幹から伸びた大小さまざまな枝々の重なり、風の流れが見て取れる葉の揺らぎ、木漏れ日から感じ取る陽の光の移ろいを、そっと視点を移しながら大きな樹木の生命力を感じ取ることができるのではないか。

ホワイトキューブから飛び出した作品「MENTAL CHAIR」に是非、座ってみてほしい。

岩野勝人

Masahito Iwano

太い鉄筋を無数に曲げて溶接した実際に座れる人型の彫刻「メンタル・チェアー」など、アートと人との関わりを追求。“まちの小さなパン屋”さんのような身近なアーティストでありたいと願って、ワークショップも各地で数多く開催。昨年はヨルダンにも出かけ、子どもたちの変わらぬ笑顔に迎えられた。昨年度の「めぐるりアート静岡」では静岡市美術館で展示。

1961年　徳島県三好郡三加茂町（現 東みよし町）生まれ
1988年　京都市立芸術大学美術学部美術科彫刻専攻卒業
1990年　京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了
大阪成蹊大学芸術学部美術学科准教授（2003－2015）、
池坊短期大学幼児保育学科教授（2015－）／京都府在住

2008年　「IWANO MASAHITO 現代アートによる徳島再見」徳島県立近代美術館（徳島）
2012年　隠岐しおさい芸術祭2012
　　「様々な作家による、隠岐・西ノ島」島根県隠岐郡西ノ島（島根）
2014年　「Erosion/Transfiguration－侵蝕と変容の先の関係性へ－」瑞雲庵（京都）
2016年　「めぐるりアート静岡　ちょっと、ざわざわ、しに行く」静岡市美術館他（静岡）

2016/11/1 TUE → 11/20 SUN

静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

私の作品は映画や写真、インターネット上の画像などの平面媒体からインスピレーションを得て、それを立体にする作業から成り立っています。それらのイメージは今居る場所や時間からは確認できない、半ば虚構の物たちです。しかし、素材を得て立体になった時、イメージは彫刻になり実存化します。そうやって制作された私の作品は、すぐに平面画像に戻れるような視覚性を持ち、常に実存とイメージの間を行き来しています。

合理化のためデジタル化が進み、実態が情報に整理されていく時代に生まれた私にとっては、目に見えているものが真実かどうかを、彫刻を通して確認する作業が必要だったのです。

今展は出身地である静岡県の美術館での初の展示となります。私の生まれたところは田園地帯の真ん中をバイパスが走り、その脇にショッピングモールが点在する様な景色の街でした。よく古い映画の中のアメリカの街の風景と重ね合わせていたのを覚えています。そんな私の制作の出発点に影響を与えたかもしれない気候や風土の中で、皆様に作品をお見せする事が出来ることを嬉しく思います。

鈴木基真
Motomasa Suzuki

映画やインターネット上の画像、ビデオゲームの中で出会った風景に、作家の想像を交えた木の彫刻を制作している。異なる物語を持った風景の彫刻を、鑑賞者の目線の高さに上げた台座の上に複数配置し、レイヤー構造を持たせた展示や、鑑賞者の視覚性を意識した、現代における新たな彫刻の可能性を追求している。

1981年　静岡県浜松市生まれ
2004年　武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒業
東京都在住

2008年　「第11回岡本太郎現代芸術賞展」入選／川崎市岡本太郎記念美術館（神奈川）
2010年　「群馬青年ビエンナーレ2010」優秀賞受賞／群馬県立近代美術館（群馬）
2013年　「瀬戸内国際芸術祭2013」小豆島16エリア（香川）
2016年　個展「鈴木基真展 Honest Place」さいたま市プラザノース（埼玉）

《Square One》2016

《Building》2010

《Ghost#1》2016

《LIFE-SIZED》2013

福井利佐
Risa Fukui

中学生の頃より、学校のクラブ活動で切り絵に親しむ。大学卒業時からは、紙を切って作る線の集積で、皮膚や毛並みをとらえ、人間や動物を描き出す独自のスタイルで、新たな切り絵の世界を切り開いてきた。近年は、それまでの黒い線とは異なる白や、他の色の線を使って、豊かさを合わせ持ちつつ、より対象の本質に迫る表現を探求している。

1975年　静岡県静岡市生まれ
1999年　多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業
切り絵アーティスト／東京都在住

1999年　「JACA日本ビジュアル・アート展」特別賞／フジタヴァンテミュージアム（東京）、グアダラハラ州立大学博物館（メキシコ）
2012年　個展「切り絵を魅せる～福井利佐の世界～」駿府博物館（静岡）
2013年　個展「LIFE-SIZED」POLA MUSEUM ANNEX（東京）
2014年　個展「福井利佐展―進化する切り絵の世界―」金津創作の森（福井）

私の作る顔の中の線は、その人の人種、職業、年齢、生きていた環境、すべての記憶が刻まれています。切り絵というと黒い紙の印象を受けると思います。黒という色はすべての色を混ぜてでき、情報量の多い色です。

そして色自身がとても強さをもっています。今回の作品ではあえて黒を使わず、白を用いることによって、より線を際立たせました。白の裏側はそれぞれの個性を表すカラーになっています。紙の表と裏の世界、落ちる影など、切りとった空間から見える向こう側など多角的に切り絵を楽しんでいただければと思います。

今回、私の生まれ故郷でもある静岡の県立美術館で展示できることを嬉しく思います。

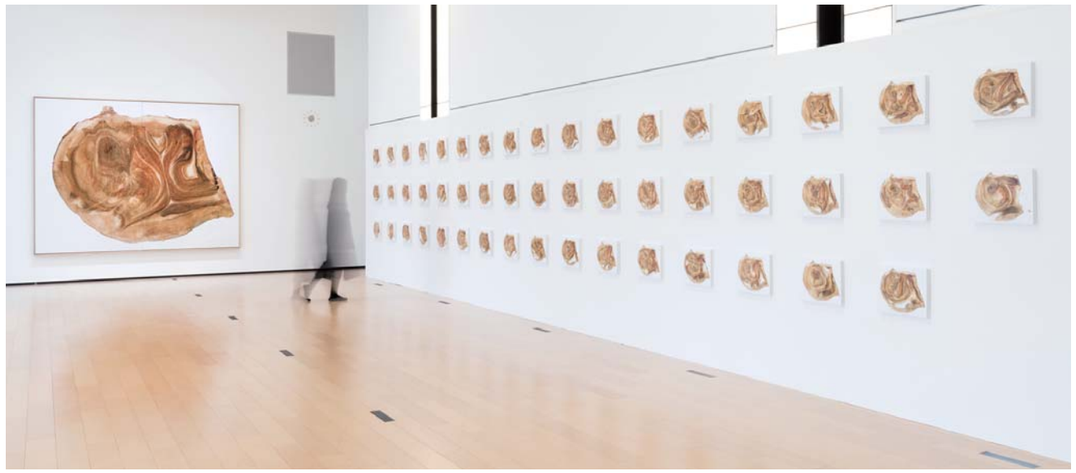
ここの美術館ができたのは私が小学生の頃だったでしょうか。美術館といえばここしかなく絵が好きな私は小中学校とよく来たのを覚えています。そんな自分の美術的思考を形成した場所で、今度は私の作品が見る人の美術的思考を刺激するかと思うと感慨深いです。

《錦鯉 No.1～No.10》2016

2016/11/1 FRI → 11/20 SUN

静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

《Misunderstanding Focus「Alec Soth」》2016



《multiple-roadside tree no.003》2016、《multiple-roadside tree no.010〜no.060》2016

Nerhol

（田中義久・飯田竜太）

グラフィックデザイナーの田中義久と彫刻家の飯田竜太によるアーティスト・デュオ。2007年結成。田中がアイデアを“練り（＝Ner）”、飯田が“彫る（=hol）”ことより命名。代表作に3分間に渡り連続撮影した約200枚のポートレートをプリントし、重ねて“彫った”《Misunderstandig Focus》（limArt, 2012）や、街路樹を5mm単位で輪切りにし撮影したプリントを重ねて“彫りだした”《multiple-roadside tree》（金沢21世紀美術館, 2016）など。

田中義久　たなかよしひさ
1980年　静岡県浜松市生まれ
2004年　武蔵野美術大学卒業
グラフィックデザイナー／東京都在住

石内都、荒木経惟、森山大道らの多くの写真集や、
アーティストの作品集の装丁、デザインを手がける。
2014年、The Best Photobooks（米TIME誌）に選出。
主な受賞にFOAM TALENT賞（オランダ）、
JAGDA賞、JAGDA新人賞、
Art Fair Tokyo 2013 Bacon Prize、
Red Dot Award（ドイツ）など。
2016年、東京都写真美術館のシンボルマークを作成。

飯田竜太　いいだりゅうた
1981年　静岡県沼津市生まれ
2004年　日本大学芸術学部美術学科彫刻コース卒業
2014年　東京藝術大学大学院美術研究科
　　先端藝術表現専攻修了
彫刻家／日本大学芸術学部常勤講師／東京都在住

2004年　「第22回 グラフィックアート『ひとつぼ展』」
　　グランプリ受賞／ガーディアン・ガーデン（東京）
2009年　「第12回岡本太郎現代芸術賞展」入選／
　　川崎市岡本太郎美術館（神奈川）
2013年　「Art Fair Tokyo 2013」Bacon Prize受賞／
　　東京国際フォーラム（東京）
2016年　個展「本棚のアーケオプテリス」
　　ガーディアン・ガーデン（東京）

紙や印刷物を素材に彫刻という手法を通じて作品を制作する飯田竜太、グラフィックデザイナーとして平面／視覚情報と向き合ってきた田中義久、ふたりの邂逅から生まれたアーティスト・デュオがNerhol（ネルホル）です。「紙」というものに対して、物質とイメージという別の角度からそれぞれアプローチし、日々大量に消費される事物や事象と向き合ってきた僕たちは、それぞれのモチーフを多層的に捉え、それらに対する固定観念を歪ませるように作品を制作してきました。僕たちはモチーフの存在態を可能な限り詳細に観察します。そして、それを大胆に歪ませるように彫り込んでいきます。

僕たちは、今は東京を拠点に活動していますが、ふたりとも静岡県で生まれ育ちました。故郷で初めて展覧会を行えることをとても嬉しく思います。Nerholの作品世界を充分に楽しんでいただけるよう、今夏に金沢21世紀美術館で発表した最新作《multiple－roadside tree》を中心に、Nerholの代表作ともいえるポートレイトをテーマにした作品を展示しました。作品から色々な刺激を受け取っていただけると幸いです。

《Atlas No.001〜 No.040》2014

2016/10/25 TUE →11/13 SUN

静岡市美術館

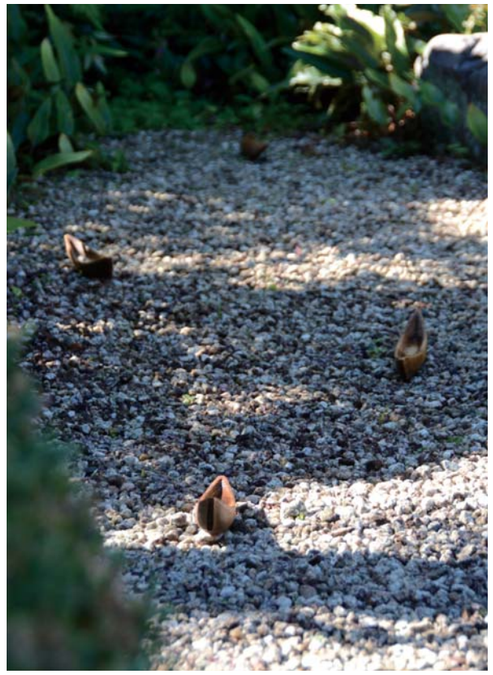
Shizuoka City Museum of Art

撮影：山中慎太郎

《望郷》2016

《いのちのまわり》2016

《キノコスイッチ》2016



《山から海へ》2016

《小枝ポッキーコレクション》2016

2016/11/1 TUE → 11/20 SUN

中勘助文学記念館・杓子庵

Kansuke Naka Cottage & Museum

木下琢朗

Takuro Kishita

山に分け入る。川を往く。森を経巡る。木下は、山川草木に聞き耳を立て、対話し、声なき声にカタチを与えていく。天と地、上（かみ）と下（しも）、彼岸と此岸を繋いでいく。わたしたちは木下のつくった物語という木舟に乗り込み、時には魚となって、その土地の記憶を頼りに両界を往還する。木下という美術家は、つまり「語り部」なのである。

1977年　静岡県御殿場市生まれ
2000年　東北芸術工科大学美術科彫刻コース卒業。
大学卒業後、富山県で欄間彫刻を修行する。
彫刻家／掛川市在住

2005年　「富嶽ビエンナーレ」入選／静岡県立美術館（静岡）
2007年　個展「こだまするカタチ」アートカゲヤマ（静岡）
2012年　個展「樹の声を聴く」春野山の村（静岡）
2014年　個展「生気遠出」ギャラリーYellow Passion（静岡）
近年では、その土地にある自然の素材を生かし、「記憶」を掘り起こし、「物語」を紡ぎ出す作品を発表している。

場の記憶

ふと浮かび上がるイメージは、
いつしか体験した記憶の一場面なのだろうか 。
場の記憶に誘われて、ある「かたち」を創造する。
「かたち」とは、固定化されたモノとしてではなく
生々流転する「いのち」の一場面生命力の瞬間を
とらえたモノとしての形象化である。
躍動する「いのち」と出会ったときの心躍る感動
今も心、奥深くに刻みこまれている。

ここ静岡の土地は、温暖な気候と風土に恵まれ
豊かな自然環境を育んできた。
それと同時に立ち止って考えることを
許されないかのような産業における資源の過剰な使用に伴い、
人と自然とのバランスが崩れることが危惧される。
今回展示会場となった中勘助文学記念館、
マッケンジー住宅では、
静岡県内の地場産材を使い
その土地の記憶を辿る展示とした。

中勘助文学記念館では藁科川、安倍川流域の材を使い、
旧マッケンジー住宅では富士山麓の材を使い作品化した。
材料とするものがどんな環境で育ち
どのような流通経路で生産されてきたのか、
そういったトレーサビリティの観点から制作を
試みたものである。

１つの「かたち」を音符としてとらえ、
これらの集合体を空間という五線譜にのせ
リズミカルに奏でる。
「かたち」あるものは響き合い
モノ語りをはじめることを願いつつ･･･。

2016/11/1 TUE → 11/20 SUN

旧マッケンジー住宅
Former Mackenzie House

マッケンジー夫妻の旧居にて、
千葉広一は、ありし日の面影を留める空間や家具調度に
寄り添いながら、自らの記憶や思いを共鳴させました。
木下琢朗はかつて富士山を眺望できたという窓辺に
さりげなく《富士山スイッチ》を配しました。

《居間／在り処》2012-2016

《階段踊り場／在り処》2016

《富士山スイッチ》2016

木下琢朗
Takuro Kishita

千葉広一
Kouichi Chiba

2016/11/20 (Sun)

バンブーストック・フェスティバル
Bamboostock Festival

最終日、地元の野菜や手作りのクラフト品、食べ物などのお店25店が集まり、
「竹の実験都市」に“市”が立ちました。
そして夕方には、みんなで竹の楽器を叩いて黄金比の音楽「たたけたけ」が流れる中、
“竹の星籠”に火が入りフィナーレに。

2016/10/30 sun・11/12 sat・11/13 sun・11/20 sun

アーティストトーク
Artist Talk

人を創作に駆り立てるものは何か？ それはどこから来て、どこへ向かうのか？
作品を前にしてアーティストが思いを語る。
それは、表現をめぐる根源的な問い、の在りかを照らし出す、幾筋もの光なのではないでしょうか。

10/30 sun

○10:00–10:30 岩野勝人 アート＆スポーツ／ヒロバ
○11:00–11:30 日詰明男 アート＆スポーツ／ヒロバ
○14:00–14:50 Nerhol 静岡市美術館

11/12 sat

○10:30–11:20 木下琢朗 中勘助文学記念館

11/13 sun

○13:30–14:20 鈴木基真 静岡県立美術館
○14:30–15:20 福井利佐 静岡県立美術館

11/20 sat

○10:30–11:20 千葉広一 旧マッケンジー住宅
○13:00–13:50 千葉広一 アート＆スポーツ／ヒロバ
○14:00–14:50 岩野勝人 アート＆スポーツ／ヒロバ
○15:00–15:50 日詰明男 アート＆スポーツ／ヒロバ

2016/11/5 sat・11/12 sat

ワークショップ
Workshop

前回と今回のめぐるりアーティストが、それぞれ講師を務めるワークショップを用意しました。
幅広い世代が一緒になって、示されたテーマや素材に向き合います。
親しみやすさのなかに驚きの展開もあり、歓びと発見に満ちたひとときになりました。

11/5 sat 「ヒロバのイス」を作ろう！

前田直紀ワークショップ
アート＆スポーツ／ヒロバ

「ヒロバ」に用意された素焼きの椅子に皆で絵つけをし、移動式のアメリカン楽窯をその場で組み立て、
その場で焼成しました。参加定員10人のところ子供から大人まで13人が参加しました。

11/12 sat 粘土で風景を作ろう！

鈴木基真ワークショップ
静岡県立美術館

参加者は、各自事前に探してきた、作りたい風景や身の回りの思い入れのある場所の写真のイメージを参照しながら、
水粘土で、立体造形を制作しました。大人6名、子ども11名の計17名が参加しました。

ヒロバと名付けました。
（アート＆スポーツ／ヒロバ）

静岡市企画局政策推進統括監　中島一彦

ＪＲ東静岡駅前の市有地の整備を行うにあたって、この場所を「ヒロバ」と名付けました。広場ですから、公園とはちょっと違い、原っぱや空き地に近い感じです。皆さんは、ヒロバ（広場）と聞いてどんなシーンを想像しますか？

アニメ「ドラえもん」に登場する広場（空地）を思い浮かべた方もいるのではないでしょうか。３本の土管が置かれた、あの広場です。ドラマではここが草野球場になったり、ある時はのび太の隠れ場所になったりしています。「ドラえもん」の物語のほとんどは、家と学校とこの広場で展開されます。広場は、のび太とその友達にとって家でも学校でもないサードプレイス、大切な第３の場所となっています。

東静岡のヒロバも、私たちのサードプレイスとなるようプランニングされています。さまざまな人が集まりライブな活動が起こる、人が集まるから行きたくなるという循環が生まれるホットな空間です。そして、そこにはアートやアーティストの力が絶対必要です。

このヒロバは、期間限定の試みですが、静岡市が進めるまちづくり「まちは劇場」の超・実験的な空間です。私たちの日常ライフを楽しくするヒロバが、街中に増殖していくための試みです。

最後に大切なことをひとつ、このヒロバは、人間が主役。ヒロバをどう楽しく使い倒すか、どんなライフスタイルを描くかがテーマです。皆様のアクティブな参加を心よりお待ちしています。

「アート＆スポーツ／ヒロバ」
ＪＲ東静岡駅前にある１５０ｍ×１５０ｍの市有地で、旧国鉄貨物駅跡「創造都市を目指す静岡市が、「まちは劇場」プロジェクトの一環として、今年度から５年間、プレイスメイキングの実験的な場として活用を図る。

ニュースレター１号より再録

めぐるり アーティスト インタビュー

Megururi
Artist Interview

4回目を迎えた「めぐるりアート静岡」。
新たなスタートに合わせ、
展覧会の内容を現在進行形で伝えるため、
参加アーティストのインタビューを掲載した
「News」を全3号発行しました。
作品のコンセプトや自身の活動、
展覧会への思いが語られた
アーティスト・インタビューを再録します。

#01	日詰明男	2016/06/29 WED	静岡市美術館
#02	鈴木基真	2016/06/29 WED	静岡市美術館
#03	千葉広一	2016/06/29 WED	静岡市美術館
#04	木下琢朗	2016/07/31 SUN	中勘助文学記念館
#05	ネルホル	2016/07/31 SUN	静岡市美術館
#06	福井利佐	2016/11/13 SUN	静岡県立美術館
#07	岩野勝人	2016/11/21 MON	アート＆スポーツ／ヒロバ

竹と隙間で築く 黄金比の実験都市

造形作家　日詰明男

#01

迷路の都市と 幾何学の自然造形

スタートは建築です。僕は、四角い建築がダメなんです。つまらなくて、学生時代に飽きてしまいました。もっと面白い空間がないだろうかと、建築の延長にある集落（都市）をさがしていたらエーゲ海にある迷路状の集落に魅了されました。それからずっと都市を設計したいと考えています。

それともう一つ魅了されたものが、美しくて素晴らしい自然の造形です。自然のカタチをつくろうとしても、なかなかできない。なぜかと考えたときに、幾何学というものがそれまでの自分の中に足りなかったことに気づき、20歳頃から幾何学を独学ではじめました。

特にとりつかれたのが、「黄金比」の自己相似性で、自分自身の中に自分自身の縮小形があるというもの。植物によく見られ、葉っぱなどの相似形がそうです。これを使って何かをつくりたいと思ったのが、今につづいています。

竹の家が建ち並ぶ 五角形の迷路

今回の「めぐるりアート」の会場となる東静岡では、ヒロバを使って黄金比の都市計画を実行します。そこは、黄金比である五角形だらけの迷路に、竹でできた家（ティピ）が建ち並ぶまちです。五角形のまちは、最短で目的地に行けるし、コミュニケーションがしやすいなどの利点があります。都会などでスラム街ができるのは、まちを四角形のブロック化したために死角ができ、孤立化が進むからです。

素材となる竹は、身近だし、安価だし、失敗しても恐くないため、みんなが何かをつくりたくなる素材です。学生に敷地だけ与え、勝手に竹でつくれというと発明をはじめます。放置竹林を邪魔者扱いせず、資源として有効利用した方がいい。多くの人が、竹でさまざまな構造物をつくることで、自分たちの住むまちをどうしたいかを考えるきっかけにもなります。

実験都市「ニューロ・アーキテクチャ」@大阪成蹊大学（2004）

東静岡に 隙間都市を創造

インフラをつくるのが僕の使命です。それを活かすのは、参加者でありボランティアのみなさんです。多くの人のアイデアが加わることで、スゴイことになります。大阪成蹊大学でやったときには、自然発生的にマルシェができ、警察や放送局も加えようと学生たちが決めて、最終的にはちゃんとした都市空間ができました。祭の日にはちんどん屋も繰り出したほどです。インフラをどう使い、どんな都市にするかを決めるのは、やはり住民です。東静岡では、大茶会やコンサート、レストランなどのアイデアが出ています。どんな新しい機能が生まれるか、今からとても楽しみです。

幾何学というと窮屈だとか、ワクを決められるようなイメージがありますが、全然そんなことはありません。四角形から五角形へ、新しい幾何学の使い方をすれば、むしろ余白や隙間が増えて人間の自由が拡大されるでしょう。その点で東静岡は隙間だらけ、どんな都市をつくるかは参加するみなさんの自由です。

最終日には消防署にも協力をしてもらい、ひとつの構造物を燃やすことでみんなの想いを昇華させ、フィナーレにしたいと考えています。

#02

光と物語と対話 in ロダン館

彫刻家　鈴木基真

イメージの中で出会った風景を彫刻に

主に風景を彫刻にしています。モチーフは、子どもの頃から観ていたアメリカ映画の風景や、インターネット上の画像、ビデオゲーム内の風景などです。リアルに体験したものではなく、視覚媒体の中で出会った風景に想像を交えて彫刻にしています。例えば、モニター上で見る映画のワンシーンの光景は、その世界観の一部しか映っていません。そこを延長して実物としての奥行きをつくり、イメージを補完して、実際の物質性を与えていくところに創造性を感じます。もとのストーリーから派生するサイドストーリーをつくっている感覚とも言えます。

さまざまなモチーフから年代や状況やスケール感もバラバラに制作された木彫作品が集まることによって、新たな視点と関係性を生み、観る人それぞれが各々の物語を想像できるような展示手法を取っています。そのために作品内に人体彫刻は存在しません。視点を一人称にし、観る人自身が主人公になって欲しいからです。

イメージに近づけるための手法

最近は彫刻だけでなく、粘土で正面性の強い彫刻をつくり、それを写真にするという作品も発表しています。画像上の平面的な風景を立体化する作業をずっとやってきて、ふと立ち止まったときに、「不必要な部分をつくらされていないか」と思いました。完全に立体にするという魅力はありますが、もっと純粋につくりたい部分だけをつくったらどうなるのだろう、と。

写真は自分の彫刻の、光、大きさ、複製などの問題を自由にしました。自分の彫刻作品は平面的なイメージから始まっています。ですからそこに回帰させたいというのは当然なことだったと思います。この写真作品を通してモチーフの選択肢が広がり、モニターサイズを超える大型の木彫作品も手がけられるようになりました。

撮影 Yoshiro Masuda

ロダン作品と自分の作品が対話

今回の展示では、是非とも自分の作品を県立美術館のロダン館で展示し、彫刻についての答え合わせ的なことをしたかった。自分がこれまでイメージと物質の関係について彫刻をやってきて、幾つか気づいたことがあります。例えば、彫刻はどちらに光源や視点があるかで見え方が全然違う。必ず作家本人が意図した理想の視点があるはずです。ロダンの作品を見ていても、同じようなことを考え、制作をしていたのではないかと感じる部分があります。その部分をロダンの胸を借り、ロダン作品との対話を通して再確認してみたいと思いました。

その答えをみなさんと共有し、彫刻の魅力を再発見し、これからの新たな彫刻の可能性を感じていただけたら幸いです。

#03

洋館と車掌車で出会う現・想

美術家　千葉広一

瞬間に感じたことをその場で定着

私の作品は、その場からインスピレーションを得て描いた絵、あるいはその時々に持つ想いをカタチにし、その場を背景にして写真に撮り、そこに言葉を添えたものです。一部室内もありますが、自然や街の中に出かけていくことの方が多いですね。

大学では油画専攻でしたが、社会人になり創作から離れていたこともあり、油絵がその素材の特性ゆえに持つ完成までの時間をもどかしく感じる様になっていました。その時に感じたことをその場で定着できないかという欲求の答えとして、Instagram（インスタグラム：写真に特化したSNS）、写真とドローイングによる表現に行き着きました。

筆ペン１本、小さめのスケッチブック１冊、そしてiPhoneがあればどこでも作品がつくれる気軽さが自分に合っていました。Instagramで作品を発表すると、国内よりも海外の方からの反響が大きく、カナダの写真サイト500pxに取り上げられ、次いで、ロシア、イタリア、イギリスなどで紹介記事が載るようになりました。

カタチにできない悩みを表現

テーマは決めずに、その時々で感じたことを表しています。高校の教員をしていますので、十代の多感な季節を生きる生徒たちから伝わる心情を表すこともあります。人間同士の関わりの中、生徒たちはカタチにできない悩みや不安を抱えています。それは大人になった自分も、かつて通り過ぎ、立ち止まり、いまでも迷い込むことのある思いです。そんな共感共鳴する部分を表現したのが、作品となったコトバやカタチです。Instagramでは、年齢を問わず共感してくれる人たちがいます。

銀河鉄道のジョバンニになった気分で

「めぐるりアート」では、旧マッケンジー住宅と東静岡駅北口ヒロバで作品を展示します。旧マッケンジー住宅では、そこで生活を営んでいた人の痕跡をかすかに感じます。時を経てかつてそこにあった体温が薄れつつある空間に自分の作品をおくことで、来た人に居場所や温もりを感じてもらいたい。

東静岡ヒロバの方には、古い車掌車を設置する予定です。その車掌車は、私がネットオークションで購入し、内装に手を入れつつ数年間暮らした空間です。車掌車のなかに入って、私の作品を見て、なにか特別な時間や空間を感じてもらいたい。宮沢賢治の銀河鉄道に乗り、ジョバンニになったような気分で見てもらえるのが理想ですね。マッケンジー氏は天体観測が好きだったとのことですが、私も多くの作品で星を取り上げ、星を見るのが大好き。安心できる場所であるのと同時に、ここからどこか違う場所に行けるような、遠くとも確かにそこにある星のような存在に思いをはせられる、そんな空間になればと考えています。

東静岡ヒロバは旧国鉄の貨物駅跡地であり、私が生まれた年は東静岡に貨物駅ができた年と同じ。マッケンジー住宅とこの車掌車が現役だった時期もほぼ同じで、何かしらの縁を感じます。マッケンジー氏が自宅で星空を見上げていた頃、東静岡の操車場の少し外れたところにあったかもしれない車掌車が、過去と今、そして未来をつなぎます。

夕刻、明かりの灯った車掌車

#04 藁科の記憶を辿る

彫刻家　木下琢朗

生々流転する「命の一場面」をとらえる

僕は、「生命力」をテーマに作品をつくり続けています。彫刻は、存在感、実態をつかめる命あるものでありたい。作品をモノとしてではなく、生々流転する「命の一場面」としてとらえています。そして素材である木の本質を追求し、木の持つ背景までも垣間見られる表現でありたいと思っています。

ある時、下絵通りにつくることに疑問を覚え、下絵ありきでは木の本質とはかけ離れているのではと感じました。木の本質を捉えるには、自生している樹木を知る必要があります。「樹」は立ち木で根っこのあるもの、「木」はその立ち木を伐ったもの。その総称は「木」です。樹木に人間が近づいていくことで、木の本質を感じることができるのではないかと考えました。

以前、アトリエがあった天竜区春野町の山の中では、動植物が息づく自然がすぐそこにあり、四季折々の景色に出会いました。そういった環境を肌で感じ、その場所で自生する樹木を彫ることで、木の特性を理解し、よりダイレクトに木の本質、さらに生物多様性のつながりを感じることができました。

自然との対話から作品は生まれる

そのことから、図案を描いてから素材を選ぶのではなくて、その木と対峙することで何ができるかを発想します。醸し出すと言った方がいいでしょうか。自然との対話から作品は生まれます。人為的に加工するばかりではなく、木が自然に反ったりする自然な風合いを生かしたモノづくりに取り組んでいます。

その場に対面したときにインスピレーションを感じ取り、そこに在るべきモノを見出し空間演出しています。場からつながる背景や環境を知ることで、自分の表現となるカタチになるのです。つくるのは、モノ語りの再生で「場の記憶を辿る」ということ。自然と人が関わり、守られている世界があるということを場の材を通して、表現しています。

藁科の自然風景をインスタレーション

めぐるりアートでは、中勘助文学記念館・杓子庵と旧マッケンジー住宅の一部が展示会場です。中勘助文学記念館では、藁科川、安倍川流域の地場産材を使ってのインスタレーションをします。そこで、中勘助が見ていた藁科川と重ね合わせてみたい。中勘助は、「藁科川を見ると、兄を思い出す」と言っていて、自伝的小説『銀の匙』を読むと、河原での出来事から兄との感性の違いに葛藤するシーンがあります。そんな背景もイメージしながら表現する予定です。

文学記念館（母屋）の座敷を藁科川に見立て、木彫りの鮎を座敷に泳がせます。縁側に近い庭の枯山水では木彫りの舟を浮かばせ、映し出すのは遠目の藁科川。同じ場所で、遠近の藁科川を見立てることができます。中勘助が暮らした杓子庵の軒には、木彫りのキノコを吊します。また、庭では藁科川の上流坂本地区の自然素材を使い、「いのちのまわり」というテーマで「わ」を創作。ワークショップ形式で、参加者が自ら調達した自然素材を用い皆で一つの「わ」を飾り付けていきます。

そして、旧マッケンジー住宅では、富士山が見える窓に富士山スイッチ（照明の引き紐につける木彫りの富士山）を吊して展示。静岡市の南と北で、過去にあった自然の景色、今も残っている景色を、自分なりの視点と作品を通して表現します。

ワークショップ

グラフィックデザイナーと彫刻家の共感

田中：ネルホルのきっかけは、10年ほど前です。僕はグラフィックデザイナーで、飯田は彫刻家ですが、彼の紙を使った作品に関心を持ち、会うことに。デザインの世界と違って、美術は自由な代わりに自己満足的なイメージがあったのですが、話をすると、共通する部分もあり、違う部分もあって新鮮でした。それを合わせたらどうなるか、それがスタートになりました。

飯田：もともと僕は「本」という形態に興味があり、既成の文庫本を「彫って」作品を作っていました。田中と出会い、自分のコンセプトを綴った文庫本を彼がデザインしました。26冊つくり、そこにA～Zまでアルファベットを１冊に１文字彫り込んだ作品が最初の作品になりました。

デザインと美術、その違いは？

田中：最初の作品は、発表する気はなかったんですが、たまたま見た人が展示すればと言ってくれて、展示することに。そこでネル（練る）とホル（彫る）のアーティスト名も決めました。

飯田：展覧会は、あまり思ったような評価が得られませんでした。

田中：デザイン業界の人にはデザインじゃない、美術業界の人には美術じゃないと言われました。何故そう言われるのか、検証するためにも制作をつづける必要性があると感じました。デザインと美術の違いは何なのか、それは本当に重要な事なのか、と。

田中義久

代表作を紹介する凱旋展示

田中：めぐるりアートでは、自分たちの代表作を紹介したいと思っています。ひとつは、金沢21世紀美術館で展示した最新作《multiple – roadside tree》。1本の街路樹を5ミリ単位で輪切りにして撮影し、プリントしました。巨大なプリントを何百枚も重ねて、年輪に沿ってカッターで１枚ずつ切り出しています。そこには、木が内包していた、何年もかけて成長して来た時間の層が顕れています。

飯田：ポートレートのシリーズ《ATLAS》も予定しています。これはモデルとなる人にじっと動かないようお願いして、3分間シャッター（約200カット）を切り続けます。しかしどうしても被写体は動いてしまう。視線は泳ぎ、揺らぎとなって表れる。それを全てプリントして重ね、1枚ずつカットしていきました。現実の人が常に孕んでいる動きを、〝揺らぎ〟としてポートレートに纏わせることで、1枚の写真では抜け落ちてしまうその人固有の何かが、顕れているように思います。

田中：これが、美術館のインフォメーションの横にあったら面白い。「この人誰ですか？」みたいな‥、そもそもポートレートってなんだろうと。

飯田：僕たちとしても故郷の静岡県では初の展示なので、とても楽しみにしています。

#05 情報の全てを変異させる事とは

アーティスト・デュオ　ネルホル

飯田竜太

「今を生きる」を切り描く

切り絵アーティスト　福井利佐

幼少期に育まれた美学

私のアーティストとしての原点は、幼少期にあるのかもしれません。実家が美容院をやっていたこともあり、お客さんが来ては髪の毛を整え、時には着物まで着付けて、キレイになっていく姿を日常的に見ていました。そして、私の作品の中に「鯉」があるのですが、これは兄の影響です。小学生の頃、錦鯉好きな兄について、よく専門のお店に行きました。そのとき見た、錦鯉の色や柄の印象が今も強く残っています。

切り絵との出会いは、中学校の時の「切り絵クラブ」。いわゆる部活動とは違う週1回のゆるい、美術の先生の趣味的なクラブでした。基本的な直線、曲線をカッターで切る練習をしてから、人物等をモチーフにしていきました。中国の剪紙のような感じです。2年生のときに、私の作品が文集の表紙に採用されたのを思い出します。

高校時代はバスケットボールに打ち込み、切り絵どころかデッサンもまともにやりませんでした。浪人して美大に入ると、まわりは絵が格段に上手い学生ばかり。絵本をつくる課題で、個性を出そうと思いついたのが切り絵でした。

人生、人種、職業を映す切り絵

最初は、輪郭をはっきり出していました。切り絵作家の滝平二郎さんのような作風に近くて、オリジナリティがありませんでした。そこで、白黒の直線的で簡略化した従来の切り絵の概念を外し、自分らしい「今を生きる切り絵」を目指しました。あるときサイエンスブックなどの人物のアップを見ていたら、シワとかの皮膚感に、その人の人生、人種、職業を感じたのです。そこから、人物の写真を撮り、それを線画で下書きをして切り抜いていくやり方が生まれました。線は実際のシワだけではなく、その人の「今を生きる」を表現しています。切った断面のわずかな反りも、その人の個性になるのです。

切り絵は絵画とも版画とも異なり、透過性があるのが特徴です。表と裏があり、影もできます。そういうところも、人間と近い。

鯉がエスコートし、表情が浮かぶアート空間

今回のめぐるりアートでは、既存の作品を県立美術館という重厚な建築空間の中でどう見せるかが私にとっての挑戦でした。まず、外にある池からエントランス、さらに内への作品展示場所へと床を泳ぐ鯉がエスコートします。これには、「美術館は入りづらい」という人を、呼び入れる狙いがあります。

そして、館内。これまではホワイトキューブのニュートラルな空間での展示が多かったため、今回の名品コーナーのような正面から見る壁展示は初めて。白壁に作品の裏面の色彩がわずかに反射することで、不思議な見え方が生まれました。これは、自分でも新しい発見でした。

ロビーの大空間では、階段近くの通常展示スペースではないところに、あえて展示しました。作品をアクリル板で挟んで、天井から吊したのです。すると、石の重厚な空間が軽やかになり、それぞれの高さの違いもリズムもでてきました。表は白く塗り、裏には色を残しているため、階段を上っていくと作品の裏側が見えて、違うイメージを鑑賞できるようにしました。

中学時代から慣れ親しんだこの美術館で展示できたことは、とてもうれしく、誇らしい感じがします。

《LIFE-SIZED〔an old man〕》2013

#06

#07

コミュニケーションするアート

彫刻家　岩野勝人

作品で人とコミュニケーションしたい

若い頃、彫刻は見ててすごいと思いましたし、憧れもありました。でも、いざ作ろうとすると、僕自身の発想が貧弱というか、その展開はあまり面白くはならなかった。何故か、と考えるに、彫刻は当時の自分にとって「上品」すぎたんです。何か、がんばって無理をしている感が強かった。朝から晩まで一心不乱に制作しても、それが自分の中で中々解消できない。

そのうちに、キャンバス地を床にひいて、足の裏に絵の具をつけて走り回ったり、石にアクリル絵の具を塗ったり、いろいろやってみました。橋の欄干のオブジェなんかも依頼されて制作したこともあります。でも、それが耐えられなくなってきたんです。準備をして、設計図を描いて、用意周到に組み立てて終了というのが自分には合わないと。そして何より、作品で自由に人とコミュニケーションしたいのに、彫刻の持つ「格」がそれを邪魔していると若い頃は感じていました。

空中に鉄筋でドローイング

25年前に京都の山中にアトリエを借りました。この先、石と金属、どちらの素材を中心に据えるかに悩み、同じテーマで石と金属それぞれで作ってみることに。その時、大理石でつくったのが「おやじのイス」という作品。父親の背中をモチーフにした石のイスで、大きな背中を見せたかった。イスそのものだけでなく、見ていた人がそのイスに座ることで今度は見られる対象になり、作品の一部になるというものでした。

これと同じテーマで同時期に鉄筋を無数に曲げ、溶接して作りあげたのが、「メンタル・チェアー」シリーズです。結局、金属の方が当時の僕には自由度があって、やりやすかった。鉛筆でドローイングするように空中に鉄を曲げて描く。やってみて気に入らなければ、切ってしまえばいい。エンピツを消しゴムで消すのと同じです。鉄筋は手で曲げます。太さ6ミリですから力はいりますが、慣れてくると曲げられるようになる。制作スピードと、できあがっていくスピードが自分の中で合致して、線を引くように立体ができる感覚、そこにはタイムラグがない。

紙の上にデッサンはしません。頭の中にあるイメージをそのままカタチにしていくために。彫刻は、真正面から見たカタチと回り込んでみたカタチが違うので、紙に書くとしたら何枚も書かなければいけないし、描いている間に別のモノになる。でも、頭の中だったら大体のイメージで360度自由に回転させられる。イメージの断片を何度も頭の中でくりかえし確認していくことで作りたいカタチがどんどん鮮明になっていく。それが、せっかちで、計画性のない自分には合っていましたし、何より、迷いがなくなりました。

人々が自然と集まる「場」に座る作品

めぐるりアートの展示でこの場所に作品を搬入した時に、千葉先生の車掌車が好い感じに置かれてました。それで、囲うように作品を3ヶ所に設置しました。去年の市美の展示とは、明らかに違う捉え方ができたと思っています。

ここに置かせてもらった日の夕方、すぐに子どもたちが反応し、何人かがすぐに僕の作品で遊んでくれました。みんな行儀よく座るのではなく、両手にぶら下がったり、座面に立ったり、もう自由気ままです。彼らにとってこの作品は、遊具でもないし、イスでもないし、彫刻でもない。でも「何やろ？」と捉えてくれたら、そこで子ども同士のコミュニケーションが生まれます。それが、一番の狙いなんです。

ヒロバというテーマが、素晴らしい。人々が自然と集まってくるような「場」を創りたいという意識にも共感しました。あれしてはダメ、これもダメと規制が多い空間ではなくて、「この場をつくっていくのはみなさんですよ」と投げかけられるキャパシティがすごく大切だと思います。今回、日詰さんや千葉さん達とヒロバの創出にご一緒できたことは、とても楽しい経験になりました。

コンテナ・アートベース

年明けから、このヒロバに輸送用のコンテナをプラットホームに、今年一年間をかけて「秘密基地」を作っていく計画です。これは静岡市が進める「まちは劇場プロジェクト」の一環です。2020年、オリンピックが開催される年までの時限事業として、開放された場の構築に主眼をおいた事業の中で展開されます。広々と芝生をはったアート広場の片隅にコンテナを設置し、そこを創造的な場としての「ヒロバ」のシンボルとして、それ自体を彫刻として捉え、大胆に手を加えて行こうと思います。

そう、今回はコンテナ自体が彫刻する対象であり、作品であり、人が関われる存在。それは、様々なワークショップの実施など、多くの人が集まり、考え、試行できる「実験工房」の機能を持った存在として、旧国鉄貨物駅の操車場跡地でもあるヒロバに実現できればと思います。そこで、みなさんと「創る」ことを通して語らい、考え、作業し、開かれた場としての意味を共有することができれば素敵かなと。アートを通して、そこから始まる物語を、体験する一人として参加したいと思います。

来場者の声

子供たちが遊具のように遊んでいました。
その声や笑顔も含めて作品なのかなー、
という雰囲気になっていました。(パート)

電車の中、自分の秘密基地にしたい。
人をかたどったいす、
子供の頃、親のひざにすわったようで
とてもよかった。(主婦)

竹の実験都市が面白かったです。(会社員)

日常とアートが同時に目に映るのが、
2.5次元の世界にいるようで素敵です。(自営業)

めぐるりと地元の風景とのコラボがとても良い

本当に電車にのっているような気持ちになれました。
作品を見たときに心が少しゆれるような感覚があって
とてもすてきでした。(学生)

とてもいいと思う。
歩いて回る楽しみがあってよい。

子供たちも大変よろこんでかけ回っていました。
良い感じですね。(事務職)

心がほっとする作品がたくさんあってよかったです。(学生)

アート＆スポーツ／ヒロバ

木から風景を彫り出す
面白さを味わいました。(団体職員)

鈴木さん×ロダンの空間がとてもおもしろかったです。

福井利佐さんの作品を見て
切り絵の考え方が変わった。(パート)

毎回楽しみにしています。
新しい作家の作品が既存のものの中で
見られるのが素晴らしい。

今後も若い作家に作品の発表の機会を多く作ってあげてください。(会社役員)

静岡県立美術館

初めて見るアート(写真の重ねと切り抜き)で、とても興味深く鑑賞した。(公務員)

展示がかっこいい！(アルバイト)

Nerholの作品を見て、
写真を重ねカッターを入れることで写真が
様々な顔をもつのが面白かった。
時間が生まれた感じでした。(大学生)

こういった空間の使い方は、
いつもと違った色を街に与えている様に思った。(会社員)

楽しい。もっと多くの場所で、
多くの人々の作品を見たい。

静岡市美術館

置いてある場所と作品との雰囲気がステキでした。(学生)

めぐるりアートがなければ,
この場所を訪れる事もなかったので、
地元の新たな発見ができてよかったです。(主婦)

文学館の雰囲気と非常に合っていたと思う。(学生)

地場産材を使ったあたたかみのある作品で、
和室の雰囲気にもぴったりでした。(学生)

日差しの心地よい日だったので、気持ちよかった。
たたみの魚が動いているように
自然に空間になじんでいた。(美術館職員)

中勘助文学記念館・杓子庵

マッケンジー邸と
美の競合、うなりました。

細かい作業にびっくり。
遠い昔を思い出させます。(主婦)

わたしはこどもだけど
こんなむかしのおうちがみられません。
みられてよかったです。(小学生)

涙が出そうになりました。(会社員)

優しさにあふれている。(講師)

おもしろいと思う。
地元の知らない施設に
行く機会にもなった。(団体職員)

旧マッケンジー住宅

ふりかえり

会期終了後、関係者で今回の「めぐるりアート」についてふりかえりました。

新たなる5会場の連携

・中勘助文学記念館や旧マッケンジー住宅は、静岡市にとって記憶遺産ともいえるような施設で景観や建物も優れているが、知る人ぞ知るという状況である。美術展の会場とするには難しい問題も少なくないが、チャレンジする価値は高い。
・中勘助文学記念館では、通常の２～３倍の来館者がいて、滞在時間が長く、ゆったりした時間が流れ、満足度が高かった。アートと向き合うあり方は多様で、会場の特色を活かすことが求められる。
・県美会場では、本館とロダン館を結ぶ通路、ブリッジ・ギャラリーに展示を広げたのは成功だった。子どもたちが敏感に反応してくれた。
・日詰さんによって、広大なヒロバをアートの空間にすることができた。ただ、３週間のうち２週間が制作だったのが残念。
・日詰作品はワークインプログレス（進行形の作品）だった。もともと人通りが少なく、手伝ってくれた中には、アートマネジメント人材育成事業の過年度受講者もいた。人数は少なかったが、ボランティア参加者がいなければ出来なかった。

キュレーションについて

・展覧会の内容、アーティスト選定で議論を深めたい。今回のテーマを決めるときにも議論したが、もっと必要では。
・第1回のとき、共同でのキュレーションをどう進めるか話し合った。キュレーションは多数決には馴染まない。バラバラでもよい展覧会は出来ない。各自が自律性を持ちつつ、全体として展覧会をどう作るか、毎回、話し合って企画してきたが、4回目となり緊張感が薄れてはいないか。初心に戻りたい。

アートな人を育てる

・学生、受講者の意見を吸い上げるのも大事。「行きにくい」「バスがあれば」「駅の近くだといいのに」などの意見があった。
・作品の質を学生はシビアに見ている。いい作家、いい作品を見せたい。地域の方をもっと巻き込みたい。
・アートを知る人と知らない人にギャップがある。広報は課題で、間口を広げたい。若い世代はSNSが中心。インパクトのある象徴的な作品があれば、写真をアップするだけで人が集まるかもしれない。

テーマについて

・地域に縁ある作家は大事。全員が静岡である必要はないが、それが全国の他のアートイベントとの違いになる。
・「静岡」だけでは展覧会のテーマにならない。会場と会場の関連性が薄い。
・今回は場所の記憶をサブタイトルに掲げたが、必ずしもそれをテーマに作家を選定した訳ではない。厳密にテーマを掲げ、地元ゆかりの作家でというのは無理がある。

マルシェについて

・マルシェは、清水エスパルスのパブリックビューイングに助けられた。それがなければ厳しかったかも知れない。
・広場の整備スケジュールが予定通りではなかった。来年度は、整備が進むので、期待できるのでは。
・出展者も初回から集客は難しいことは分かっている。普通のマルシェではなく、アート作品の一部としてマルシェが出来たことに満足していた。成功だったと思う。

【参加者】静岡大学：白井嘉尚、平野雅彦、名倉達了／静岡市美術館：以倉新、伊藤鮎／常葉大学：堀切正人／スノドカフェ：柚木康裕／静岡市役所：萩原智美、関本早苗／静岡市文化振興財団：池田博史、中村美咲／ジッカデザイン：望月一弘／片桐義晴
2017年1月24日（火）10：00～12：00　静岡市美術館ワークショップ室

成果と課題

以倉新（静岡市美術館学芸課長）

今回から静岡市が主催に入り、東静岡の広大な「ヒロバ」が会場に加わるなど枠組みが大きく変化した。特に「ヒロバ」は、市が進める「まちは劇場」プロジェクトの一環として、今後4年間、“スポーツ＆アート”で実験的な試みを続けるという。静岡の地で、今を生きるアートを紹介してきた「めぐるり」も今年から協力することになった。実験的な試みをいかに根付かせていくか。今を生きるアートの魅力は、作品だけでなく、そのプロセス、作家の姿にある。そこで、チラシに代えてNewsを3号発行しアーティストのインタビューを載せた。何が起きようとしているのか現在進行形で伝えることで、多くの方に関心を持って貰えたら‥、試行錯誤は続く。

川谷承子（静岡県立美術館上席学芸員）

今回から、体制が大きく変化するなか、県美会場では、これまでの方針から逸れることなく、静岡県ゆかりの2人のアーティストを迎え、エントランスとロダン館で展示を行った。アーティストたちは、展示の機会を真摯に受け止め、今できる最大限の力を尽くしてくれた。かつては若手作家のキャリア形成のために有効に機能していた、地方公立美術館での現代作家の小企画展は、予算減少のため大幅に数が減少した。それらに代わるものとして、「めぐるりアート静岡」への参加が、若いアーティストにとって、次へのステップにつながる場所であって欲しい。キュレーション側は、作家の選出、展示の記録を残すことなどへの、こだわりを持ち続けて行きたい。

堀切正人（常葉大学准教授）

本展の特徴の一つは、人材育成であった。過去3回は静岡大学アートマネジメント力育成事業の一環として、その受講者による多くの自発的な企画が実施された。しかし今回はこの事業を外れたことにより、受講者というかたちでのサポーターは存在しなかった。そこで受講者ＯＢ、ＯＧ有志による活動を考えたが、展開できず、唯一、前回の受講者企画で出展いただいた前田直紀氏によるワークショップが開催されたにとどまった。サポーターの参画や人材の育成に、制度的、予算的な仕掛けや裏付けが必須ではないだろうが、なければやはり脆弱となる。アートイベントの社会への浸透、人的交流の広がりのためにも、その仕組み作りについて今一度検討したい。

柚木康裕（オルタナティブスペース・スノドカフェ代表）

地域活性の切り札として全国津々浦々で開催されている芸術祭。もうひとつ地域の賑わいを作り出す仕組みとして昨今人気なのがマルシェ（限定的な市場）である。東静岡駅前「アート＆スポーツ/ヒロバ」の日詰明男氏の作品を通して、この二つが融合した。アートが地域社会で展開される理由にエコノミーへの波及があるが、今回のマルシェ開催はそれを反転した形を望んだ。つまりマルシェ（エコノミー）をアート作品に介入させてしまうことである。商店主とお客はアート作品の一部となり、即席のコミュニティや売り買いの行為そのものに批評性が帯びることで作品の多様化を目指した。このような社会との関与により、アートを開いていくことを今後も積極的に試みたい。

平野雅彦（静岡大学特任教授）

タイトルに「めぐるり」とあるように、本取り組みは参加するいくつかの会場をめぐることそのものに意味を持つ。複数の作家による「同時開催」ではなく、会場と会場の距離や時間、間にもメッセージがある。それは、巡礼と似ている。めぐっていく行為そのものに気づきが潜んでいる。気づきのヒントのひとつに、まちやわたしの中にある重層的な「記憶」の掘り起こしと再創造がある。鑑賞者はある会場で出会った作家や作品に触発され、揺すぶられることによって起きたさざ波のような記憶を抱えながら次の会場に歩を進める。そこにめぐっている最中に出会った風景や言葉、音が重なっていく。それによって次の作品の見方が変わっていく。だからこそ、めぐる。

名倉達了（静岡大学助教）

「めぐるりアート静岡2016」は、静岡市の有する会場が新たに加わり、これまでとは異なるいくつかの試みがなされた。こうした変化のタイミングで企画に携わったことで、今後の課題を強く考えさせられたように思う。昨今、日本全国で大小様々なアートプロジェクトが展開され、社会へ浸透すると同時に本当の意味での有益性が問われている。４回目の開催を終えた本展も、静岡という地域により深くコミットした活動が重要であろう。2017年5月には「アート&スポーツ/ヒロバ」が東静岡にグランドオープンする。この場を通して展覧会期に収まらない継続的なプログラムを模索し、静岡でアートを、アートで静岡をめぐる新たな形が生まれればと考えている。

白井嘉尚（静岡大学教授）

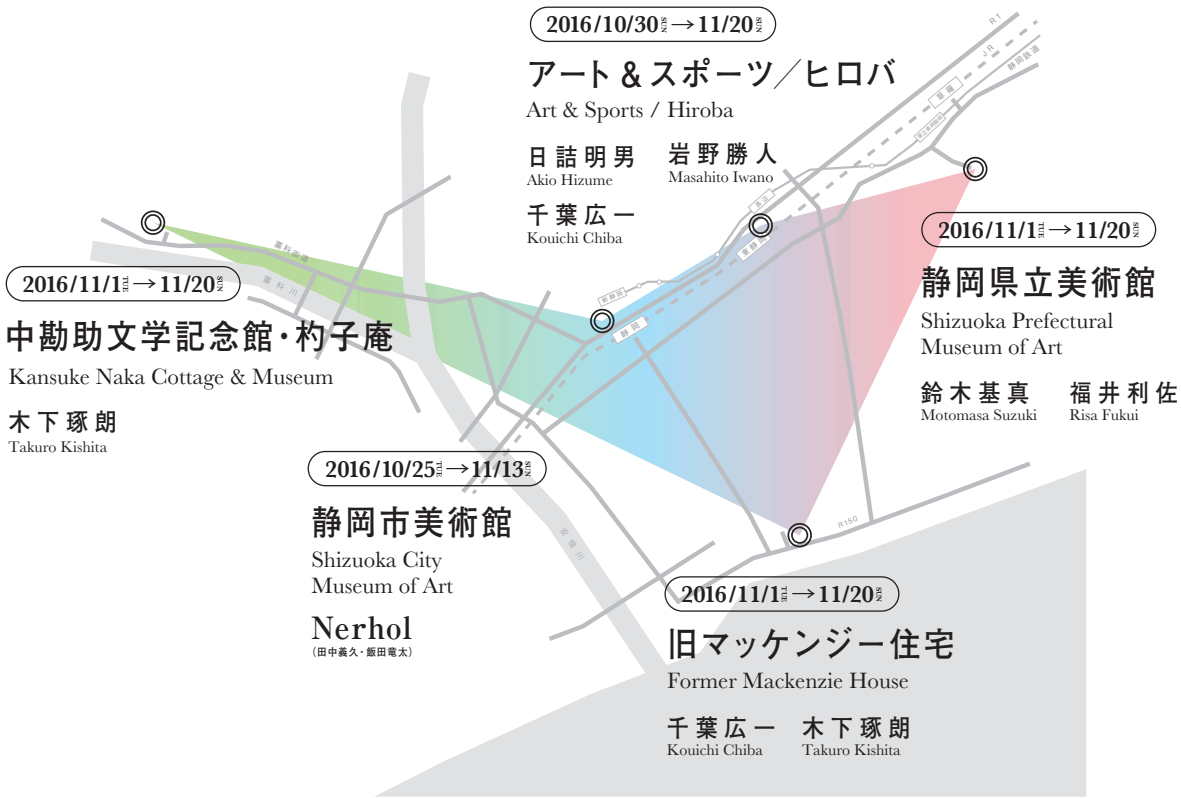
静岡市「まちは劇場」プロジェクトの「超・実験的な空間」。JR東静岡駅北口の広大な市有地が、新たな会場として加わることで、キュレーションチームの構想力・実行力が試された。それは、この地の大切な文化資源である旧マッケンジー住宅と中勘助文学記念館も同様である。浮上したアイデア全てを実現できたわけではないが、いずれも場の記憶を呼び覚ますとともに、現在進行形のアートに接することのできる身近な場としての可能性を示せたのではないか。前者の「アート＆スポーツ／ヒロバ」は、今回は、約３週間という会期中だけの展開であったが、次年度はその名に恥じぬ、通年にわたる活用のあり方を模索してゆきたい。

展覧会
めぐるりアート静岡　記憶をめぐる 記憶をつくる

会　期：2017年10月14日～11月12日
主　催：静岡大学、静岡県立美術館、静岡市美術館、静岡市、（公財）静岡市文化振興財団
協　力：オルタナティブスペース・スノドカフェ
企　画：白井嘉尚（静岡大学教授）
　　川谷承子（静岡県立美術館上席学芸員）
　　以倉新（静岡市美術館学芸課長）
　　堀切正人（常葉大学准教授）
　　柚木康裕（オルタナティブスペース・スノドカフェ代表）
　　平野雅彦（静岡大学特任教授）
　　名倉達了（静岡大学助教）
会　場：アート＆スポーツ／ヒロバ（日詰明男・千葉広一・岩野勝人）
　　静岡県立美術館（福井利佐・鈴木基真）
　　静岡市美術館（Nerhol）
　　中勘助文学記念館・杓子庵（木下琢朗）
　　旧マッケンジー住宅（千葉広一・木下琢朗）
事務局：漆畑雅子（静岡大学）

記録集
めぐるりアート静岡　記憶をめぐる 記憶をつくる

発行日：2017年3月27日
編　集：企画者一同＋片桐義晴
写　真：遠藤幸廣（p10・p13・p22・p23）
　　加藤和夫（p14・p15・p16・p17・p20・p21・p22）
　　石川綾子（p1・p8・p9・p24・p25）
　　千葉広一（p11・p22・p23）
　　山中慎太郎（p18・p19）
デザイン：望月一弘（ジッカデザイン）
印　刷：松本印刷
発　行：国立法人 静岡大学 〒422-8529 静岡市駿河区大谷836



http://megururi.net